アルケイアー記録・情報・歴史ー
第一五号　二〇二〇年一一月　五三ー七〇頁
南山アーカイブズ

南山大学史における ヨハネス・ヒルシュマイヤーの時代

永井英治
南山大学国際教養学部国際教養学科

Johannes Hirschmeier at Nanzan University

Department of Global Liberal Studies, Faculty of Global Liberal Studies,
Nanzan University
NAGAI Eiji

Archeia: Documents, Information and History
No.15 November, 2020 pp.53-70
Nanzan Archives

はじめに
一　キャンパスの整備
二　カリキュラム改革
三　一九七〇年代の学長ヒルシュマイヤー
四　第二代学長沼澤喜市の印象
五　国際化という言説
六　ヒルシュマイヤーの時代―むすびにかえて

南山大学史におけるヨハネス・ヒルシュマイヤーの時代

永井英治

はじめに

南山アーカイブズの前身のひとつである南山大学史料室は、さきに南山大学社会倫理研究所と共同して、南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤーが執筆した論考や講演録を集成して論文集・著作集を刊行した。[1] また、この編集作業に参加したリチャード・ジップルによって、神言修道会員としてのヒルシュマイヤーの草稿（ニュースレター原稿）を分析した論考が発表された。[2] 本稿は、それらの成果に基づき、南山大学史における学長ヒルシュマイヤーの時代を考えようとするものである。

ヒルシュマイヤーに限らず、初期の南山大学の歴史を時期区分しようとすると、次のように学長による区分が有効であることがわかる。

初代学長アロイス・パッヘの時代は、南山大学の創設期であり、南山大学がその後に学部学科を増設させていく足掛かりが作られた時代である。まだ学内の諸機構の分節化が十分には果たされず、さまざまな事柄にパッヘが構

想を膨らませていた時代であった。

第二代沼澤喜市の時代は、キャンパスの移転という大事業の実現と学生運動／大学紛争の時代であった。この時代は、今日に続く南山大学の祖型が形成されたといえるのであるが、研究者としての側面が強かった沼澤にとって、負担を強いられた時代でもあった。

ヒルシュマイヤーの時代は、学部学科の増設が一段落し、質的充実を果たす時代であった。具体的には、カリキュラム改正と研究所の設置、キャンパスの整備である。それらは、今日まで続く体制を含んでおり、二十世紀の南山大学の物心両面を規定することとなった。第五代ハンス ユーゲン・マルクスの時代に実現した新キャンパスの設置と新学部の増設、既設学部の改組に至るまで、ヒルシュマイヤーの時代の体制は南山大学の基礎をなしたと考えられる。

本稿では、以上のような見通しの下、ヒルシュマイヤーによる大学運営が実施した施策について整理し、ヒルシュマイヤーの時代の位置付けを考えてみたい。史料となるのは前掲の論文集・著作集、いくつかの論考、そして『南山大学五十年史』[3]であり、本稿は年史を利用した論考の試みでもある。

一　キャンパスの整備

南山大学は、一九六四年に名古屋市昭和区五軒家町から山里町へ移転した。五軒家町のキャンパスは敷地を十分に確保することが難しく、学部学科の増設に校地校舎の条件が制約となってしまうため、南山大学としては必然的な移転であった。

新キャンパスは、モダニズム建築の旗手であるアントニン・レーモンドが全体を監修した、統一されたデザインのキャンパスであった[4]。このデザインが現在の南山大学まで踏襲されているため、南山大学のキャンパスはレーモンド建築の名によって理解されている。それは個々の建築物のデザインとして理解されるにとどまらず、キャンパス全体の基本デザインとして理解される。建築の表層では打ち放しコンクリートと朱色のコントラストが注目され、キャンパス全体としては丘陵の突端部分に位置し高低差をそのままとした造成と繁茂する樹木からなる「自然」なキャンパスが想起されることがレーモンド建築の特徴になっている。

レーモンドの建築五原則に「自然に」という視点があり、レーモンド自身が南山大学について「自然を基本として」と説明したために[5]、現在のキャンパスにも見える樹木が繁茂したようすがレーモンド建築に由来するものとして理解されている。しかし、現在の南山大学の「緑」の象徴として紹介されることの多いグリーンエリアは、はじめからあったわけではない。

グリーンエリアは、レーモンドの全体設計では緑の芝生とは正反対の野球グラウンドであった。このため、グラウンドの南に位置する校舎は、風の強い日にはグラウンドから巻き上がる砂塵のため窓が開けられなかったという。グラウンドを移転し、跡地をどのようにするかが、南山大学の課題となったのである。

グラウンドの改修に先立つものと思われるラフ・スケッチが、レーモンド設計事務所に残されている[6]。それによれば、南山大学のメインストリートから渡り廊下のように通路を延ばし、その先に研究施設を配置するプラン、屋外劇場を設置するプランなどが構想されている。共通していることは、グラウンドの跡地に何らかの建築物を設置する発想である。

屋外劇場は、野外宗教劇『受難』公演のためのものであることは明らかである。実現されれば、野外宗教劇はも

ちろんのこと、学生の課外活動の場として利用されたであろうことが予想される。キャンパス内の野外劇場は、実現していれば南山大学の「顔」になっていたかもしれない。

研究施設の設置は、研究所の設置に対応するものであったことが窺える。どのような施設を設置するかは、この空間をどのように位置付けるかに直結した。ヒルシュマイヤーが選択したのは、何も作らないというものであった。

厳密に言えば、何も作らなかったわけではない。メインストリートから階段を数段降りたところから緩やかな斜面をつくってそこに芝生を張り、グリーンエリアとしたのである。この改修は、緑の芝生を貼ることがレーモンドの建築哲学からはずれない—むしろ、建築哲学にそって修復したものと見なされ、その後の南山大学の「顔」となって、広報印刷物の表紙を飾った。

ヒルシュマイヤーによる改修はキャンパスの中に溶け込み、グリーンエリアがレーモンドの構想であるという誤解を生み出すほど、ヒルシュマイヤーによる改修であることは忘れられていった。

キャンパスの整備では、L棟の建設が注目される。この建設事業は、「南山大学国際化プロジェクト」の一環として行なわれたことが特徴である。「南山大学国際化プロジェクト」とは、主たる意図はL棟建設のための寄付金募集であり、その資金によってL棟建設の他、視聴覚機器の整備、外国人留学生別科の設置などが予定された。正月の新聞紙上に大きく掲出されたこのプロジェクトについては、新聞によって初めてその名を聞いた大学構成員も少なくなく、休み明けの会議体ではその説明がなされた。現在では改修されて同時通訳の設備を備えた会議室やL教室はなくなってしまったが、L棟にはヒルシュマイヤーを記念するプレートが今も掲げられている。

L棟に特徴的なことがもうひとつある。高さである。レーモンドの構想では、もっとも高い建築は第一研究棟であった。地上六階の建物がメインストリートを跨ぐように建てられているほかは、レーモンドのプランでは低層で

まとまっていた。メインストリートからの頭上の視界が確保され、開放的な建築群となっていた。L棟は高層として建てられたのであるが、その横にグラウンドに降りる道があって圧迫感は少なかった。

K棟、L棟がメインストリートに面して建てられたことにより、レーモンドの構想は維持され、メインストリートに面して校舎が建ち並ぶ景観が保たれた。こうして、ヒルシュマイヤーの時代のキャンパスの整備は、グリーンエリアの整備を除きレーモンドの基本プランを維持したのである。(7)

二　カリキュラム改革

南山大学は、来日した神言会総会長シュッテの提言により特徴的なカリキュラムを有するに至っていた。それは、学部・学科・専攻を問わず、専門科目に哲学、宗教学を選択必修として配置していたことである。カトリック大学として卒業生に付与する西欧的教養という位置付けであったと思われ、神学科を除けば明らかに専門科目の中で異彩を放つこれらの科目は、実のところ、学部教育という視点からは歓迎されていなかった。専門科目の中に哲学・宗教学が選択必修として配置されていると、本来の専門科目として学んでほしい科目が圧迫されるという理由からである。

そのような理由は、見方を変えればカトリック大学であることを否定することにもつながりかねない。しかし、南山大学の学部の中にはカトリック大学としての存在意義とは全く異なる理由から設置されたものもあった。早くから増設の話が出ながら、五軒家町キャンパスの狭小さの故に遅れ、キャンパス移転の目途が立って増設された経済学部がそれである。南山大学が地域の要請と説明する経済学部の設置は、カトリック大学であることから求めら

れるものとは言い難かった。そして、さらに遡れば南山大学の創設期にカトリック的経済学を講義できる人を探し、ついに諦めたという事情も、カトリック大学であることと経済学教育とが両立困難であったことを示していよう。

専門科目の中に哲学・宗教学が学部・学科を問わず設置されているという南山大学のカリキュラムの特徴に、初めて改革の手を入れたのは、他ならぬヒルシュマイヤーが在籍していた経済学部であった。これは、神言会員であり、学長であるヒルシュマイヤーであるからこそ可能な改革であり、いまひとつの事情として経済学部の専門教育からの強い要請であったことが予想される。

社会科学部社会学科経済学コースの段階から、南山大学は経済学に関して多くの講義科目の授業を提供してきた。経済学部はその伝統を継承したのであるが、それは学生に多くの授業という選択肢を提供するとともに多くの授業を履修してほしいという意図を込めていたものと思われる。そうした意図の一方で、哲学・宗教学が専門科目の中に配置されているため、経済学の専門科目履修が制約されてしまうという反応を生んだものと考えられる。経済学部はその制約を改革したのである。

ヒルシュマイヤーは学長として何度かカリキュラム改革に言及した。大学設置基準の強い規制の下では、カリキュラム改革の大胆な実施は不可能である。しかし、ヒルシュマイヤーが配置される経済学部は、南山大学の特徴的なカリキュラムを改革することで、これを実現可能にしたのである。それが哲学・宗教学の削減であったことは、神言会総会長シュッテの提言が含意するキリスト教に基盤を置いた西洋的教養主義[8]の同時代的意義よりも、カリキュラムが優先されたことを意味する。

しかし、ヒルシュマイヤーは異なる方法を考えていたようである。それは、研究所を設置して哲学・宗教学の理解を深化させ、その成果を大学教育に反映させることであったらしい。ヒルシュマイヤーが設置した南山宗教文化

研究所、南山社会倫理研究所は、設置趣旨に大学教育への反映を直接謳っているわけではないが、ヒルシュマイヤーの大学運営を総合的に理解すれば、このように考えることができよう。現在に至るまで、南山大学の付置研究所はこの二つと人類学研究所である。人類学研究所は大学設置申請書ですでに予定されていた。残る二つがヒルシュマイヤーの時代に設置され、それが南山宗教文化研究所と南山社会倫理研究所であったことは偶然ではない。経済学部から哲学・宗教学に関する授業を減らす代わりに、ヒルシュマイヤーは哲学的な雰囲気をもつ経済学関連の授業にこだわった。はじめ「経済と倫理」研究所の名称で設置された社会倫理研究所の成果は、そのような授業に反映されるべく位置付けられたと考える。

三　一九七〇年代の学長ヒルシュマイヤー

一九七二年に学長に就任したヒルシュマイヤーは、一九六〇年代末の学生運動に対し、大学の意思決定と運営の責任を持つ学長としては対峙するものではなかった。ただし、ヒルシュマイヤーは一九六九年に沼澤喜市学長の下で臨時学長補佐に就任した。この就任時期からわかるように、学長補佐の人事は緊急性の高い、職務の遂行が強く期待される措置であった。沼澤は学生運動への対応を学長補佐に委ねており、学長告示の筆跡は臨時学長補佐である宮川茂夫のものであった。ここでは、一九六〇年代半ばの学生の行動から振り返ってみたい。

学生運動の前史のひとつとして、大学移転への反対行動が一般論として指摘されている(9)。南山大学はいわばその最適の事例となり得たのであるが、移転への反対は、残されている資料を見る限り暴力的であったと評されるものではない。移転を急ぐ大学から示されたスケジュールに対して学生がこれに反対し、その結果、一九六四年の春に

移転となったのであるから、学生の主張は大学も共有できるものであった。

五軒家町キャンパスから山里町キャンパスへの移転は、通学手段という点では圧倒的に不利になる。しかし、学生が移転そのものに反対しなかったのは、五軒家町キャンパスの狭小さを実体験していたからと思われる。しかも、移転より早く、経済学部、外国語学部が新設された。経済学部は事実上、社会科学部からの改組であり、外国語学部のうちイスパニヤ科は文学部西語の改組であったから、純増した学生数は二学部新設の割には少なかったのであるが、もともと五軒家町キャンパスでは校地・校舎とも十分ではなかった。学生は、新キャンパスの移転を切に希望していたはずである。

一九六〇年代半ばの南山大学の学生の行動としてもうひとつ注目されるのは、外国語学部のカリキュラムに関する提言があげられる。外国語学部英米科は教職を念頭に置いたコース（文教コース）と一般企業・公務員への就職に向けたコース（実務コース）とに分かれていたが、実務コースでは英語に関する授業は外国語学部の教員が担当したものの、就職に向けて英語以外を修得することを目指した科目群は経済学部の教員に委ねられていた。外国語学部の学生はこの状況を是正すべく、外国語学部を持つ大学から便覧などを取り寄せカリキュラムを比較検討し、外国語学部の授業が外国語学部の教員によって開講されるべきことを主張した。この主張は印刷物によって公開されており、当事者の手から開かれた主張になっていた。このことに注目した岩野一郎は、これらの学生の行動と主張が、後の学生運動とは異なる性格のものであったと論じている[19]。岩野は、学生運動の担い手とも交友があり、問答無用で学生運動を批判していない。そのような岩野による評価は、信頼できるものである。

このように、南山大学における一九六〇年代半ばの学生の行動は、学生運動の前史と位置付けられるものではない。それでは、南山大学の一九六〇年代末はどのようにして学生運動の時代となっていったのであろうか。

一九六〇年代末の学生たちの主張は、政治的な主張だけでなく、学内の問題についても言及していた。現在では珍しくなくなった学費スライド制の導入と、大学が代理徴収していた学生会費の交付先をめぐる問題である。このうち、学生会費の交付先をめぐる問題は、政治的主張を展開する学生会の選出手続きに問題ありとして起こっており、単なる手続きをめぐる問題ではなかった。学費スライド制の導入は在学生には影響しないものであったが、学生たちはこの問題に敏感に反応した。それは、学費スライド制導入反対が学生の総意として決議されたことによく現れている。

学生の主張から学費スライド制導入反対が後退したとき、学生の主張は政治的色彩を濃くするものになった。そして一般学生は、学生会を主導して政治的主張を展開する行動から距離を取るようになった。図書館前でスクラムを組む活動家学生たちを遠巻きにする一般学生の姿は、南山大学の学生たちの構図を象徴するものである。南山大学の学生運動が政治的主張を中心とした時、他大学の学生運動からは遅れていただけに言動は先鋭化し、それゆえに一般学生から乖離した。ヒルシュマイヤーは、そのような学生運動の高揚の中、学生から暴行されるという経験を持ったのである。

しかし、この経験はヒルシュマイヤーに学生運動への負の感情のみをもたらすものではなかったようである。学長としてのヒルシュマイヤーの発言には、学生運動の一部を理解できるものとする内容が含まれている。学長としての立場が、活動家とはいえ学生を否定するばかりではいけないという意識が働いたのかもしれないが、それだけでも学生運動に対する評価になる。あるいはこのようなヒルシュマイヤーの姿勢に、学生との距離の近さが反映しているのかもしれない[11]。

四　第二代学長沼澤喜市の印象

南山大学を現在の視点から見たとき、一九六四年のキャンパス移転は大きな画期となっている。名古屋市昭和区五軒家町から同山里町への徒歩圏での移転である。しかし、この移転はその距離をはるかに超えた変化を南山大学にもたらした。校地校舎の圧倒的な拡大である。これにより、南山大学は学部学科の増設―とくに長年の課題であった経済学部を設置―することができた。

すでに述べたように、新キャンパスはアントニン・レーモンドが全体を設計したことが喧伝され、それは今日にまで及んでいる。レーモンド・リノベーションという補修計画である。しかし、この言説は三人の関係者の存在を忘れている。一人はヒルシュマイヤーそのひとである。現在のキャンパスを考えるとき、レーモンドとともにヒルシュマイヤーの存在を忘れるべきではない。もうひとりはアルベルト・ボルト理事長である。校舎の建設それ自体は学校法人南山学園の管轄下にあり、ボルトは南山学園の代表者として新キャンパス建築を監督した。キャンパスの新設工事に際し、樹木一本を伐採するにも、レーモンドまたはボルトの許可が必要とされたと言われたほど、ボルトは前面に出て南山学園の代表者として工事を監督した[12]。そして、第三の人物が第二代南山大学長沼澤喜市である。沼澤こそ、初代学長パッヘの意志が実現され、南山大学の移転が実現した時期の学長である。しかし、沼澤の姿は南山大学の移転という舞台では重要な役柄を与えられていないと思われるほど、希薄である。

キャンパス移転から数年後、南山大学でも学生運動が見られるようになった。このとき、退院して間もない沼澤を学生たちが監禁し、機動隊導入によって解決が図られる事件が起こった。この経験が、繊細な感性の持ち主であった沼澤にトラウマのごとき負担となったことは想像に難くない。やがて沼澤が学長として学生運動に対処すべき

業務は学長補佐に事実上一任された。南山大学を退職した沼澤は二度とキャンパス内に足を踏み入れなかったとされる。

沼澤のこのような経験と姿勢が時系列を遡って適用され、大学移転という大プロジェクトに学長の姿が希薄であるという印象を作り上げたとしてもやむを得ないのではなかろうか。また、キャンパス移転は前学長の積年の夢であったことは間違いないが、沼澤にとっては前任者の立てた計画の実現である。それでも、沼澤にも感慨はあったらしい。一九六九年、パッヘが日本を訪問し、南山大学新キャンパスを視察した。視察は、パッヘの健康に配慮し、車で回る形で行なわれた。その車中、パッヘが予想よりキャンパスが狭いことを感嘆すると、沼澤は歩いて回ればもっと広く感じると洩らしたという。眼前の人物の計画を実現したことに沼澤にも自負はあったのではないか。それを本人から否定されたのである。このときの沼澤の心境はかなり複雑だったのではないかと推測される。

こうして沼澤と新キャンパス建築とは関連して語られることが少なくなり、学生運動についても大学運営に消極的な学長という印象が形成されることになる。一九六八年八月、いわゆる大学立法の成立に際し、大学人の発言が各新聞に掲載された。ほとんどの論者が大学立法に反対する中で、沼澤は評価できるところもあるという異例の発言をした。その後の対学生交渉の中で沼澤の発言は旋回し、大学立法に反対するものとなった。沼澤には、学長として相談すべき相手が少なかったのではあるまいか。

沼澤喜市学長による新キャンパス建築とキャンパス移転という言説が形成されないのでれば、関係者か言説の構成が変わることになる。キャンパス移転は大学の出来事であるから、南山大学に所属しない人間には関係付けられない。残るは新キャンパスそのものであるが、建設工事には学園理事長のボルトが深く関与し、新キャンパスそのものには設計者であるレーモンドが関係付けられる。大学に係ることであるだけに、学園理事長といえども間接的

な関与者と大学関係者には思われてしまう（学園が発注する工事であり、学園が直接の当事者なのであるが）。消去法で残るのは、レーモンドが設計したキャンパス全体という言説の可能性である。こうして、沼澤の印象が希薄になっていく一方で、レーモンドの設計という言説はことあるごとに呼び起こされることになる。

五　国際化という言説

ヒルシュマイヤーによる国際化プロジェクトは、プロジェクト実施のための募金が注目を集めたが、事業には大きく二つの柱があった。一つは視聴覚施設を備えた教室を持つ校舎の建築と、既存の校舎への視聴覚施設の充実というハードの側面であり、もう一つは外国人留学生別科の設置による「国際化」の推進であった。

『南山大学五十年史』を繙くと、ヒルシュマイヤーの時代から、学部学科の新設・増設、研究組織の開設にあたって「国際化」を推進するためにこの事業を行なうという設置趣旨の解説が多く目につく。しかし、「国際化」という言葉の意味するものは多様であり、一義的に論じられるものではない[13]。外国人留学生別科の開設の場合、「国際化」で意図されるものは留学（してくる学）生受け入れ機関の設置であった。ただし、設置者の意図はそれにとどまらず、留学生受け入れ機関を学内に設置して、留学に関する交換協定を結び、留学（する学）生を増やすことを目的としていた。

南山大学外国人留学生別科の特徴は、留学生が日本人家庭にホームステイすることにある。このため、留学生を受け入れるホストファミリーへの依存度が高い。ホームステイは現在まで続いているが、その一方で留学生寮の要望もある。ヒルシュマイヤーは、南山大学のみで留学生寮を建設することは困難と考え、また、複数の大学の留学

生が交歓できる利点を考慮して、名古屋市による設置を求めた。現在の国際留学生会館である。留学生を受け入れる条件を南山大学側で確保することが、ヒルシュマイヤーの意識にあったのではないか。ホームステイに依存することの限界を、ヒルシュマイヤーは冷静に認識していたと思われる。南山大学に留学してくる学生数を確保することは、交換留学で南山大学から留学する学生の枠を確保することに通じる。外国人留学生別科の円滑な運営は、南山大学本科生の教育に直結したのである。

一方で、教育研究の内容に係る国際化もあった。法学部の設置に際し国際化の文言が設置趣旨に見られたが、外国法を研究する教員を擁することでその実現が図られた。文学部国語学国文学科の場合には、国際化は近代日本文学を欧米の文学との比較の視点から研究することとされた。これらのような場合、端的に言えば教育研究を担う教員が問題となる。南山大学には以前から教員の留学に関する規程があり、留学が制度化されている。さらに、成立期の南山大学は二年度にわたって若手教員の米国留学を実施しており、教員の国際的経験は確保されてきた。したがって、留学の活性化をもって国際化と理解するのであれば、そのような国際化は南山大学ではある時期から実施されたというものではない。創設期から南山大学は国際化を志向していた。

さらに、神言会員を南山大学の教員にすることが期待できるように、教員の国籍は日本のみではなかった。一例を挙げれば、設置認可申請書段階の教育学科専任教員はほぼ外国人であった。これは、外国人の教員が、語学・文学にとどまらない分野で教育研究に従事したことを意味する。南山大学のキャンパスは、国際化を標榜する以前から国際化されていたのであり、相対的に国際的な雰囲気の中で教育研究が行なわれてきたと評価できよう。

もちろん、南山大学が国際化を志向してきたことを以て、国際化という方針がその都度確認されなくてもよいということではない。さらなる国際化に牽引されて、現状が活性化し、新たな要素が注入されるのである。南山大学

の歴史はその積み重ねであり、ヒルシュマイヤーの時代はそうした確認行為の嚆矢であったといえよう。

六　ヒルシュマイヤーの時代―むすびにかえて

ヒルシュマイヤーの名を知る南山大学の人間にとって、ヒルシュマイヤーは何よりも学長である。しかし、ヒルシュマイヤーと専門を同じくする人間には、ヒルシュマイヤーがカトリック大学の学長であることは知られていなかった。これは、ヒルシュマイヤーの裾野の広さを示すとともに、研究と信仰が一体となっていなかったことを物語るのではないであろうか。翻って南山大学の歴史を概観すれば、経済学部設置に見る南山大学の教育体制はカトリック大学であることと専門教育とが統合されているわけではなかった。ヒルシュマイヤーの研究とそれに基礎付けられた専門教育は、南山大学にある教育の特徴を継承したといえよう。その意味で、ヒルシュマイヤーによるカリキュラム改革は、南山大学が抱える矛盾をそのまま受け継ぎ、解決を図ったことになる。こうして、ヒルシュマイヤーの時代は経済学部が設置される五軒家町キャンパス時代の最後に結びつくことになる。

しかし、南山大学の山里町キャンパスへの移転を果たしたのは沼澤喜市であった。ところが、新キャンパス建設を南山大学サイドで担ったのは南山学園理事長のアルベルト・ボルトであった。そして、新キャンパスを設計したアントニン・レーモンドの名はその後も繰り返し強調されることになる。このような理由により、沼澤喜市の名は新キャンパスと強く結び付くものではなくなってしまったのではないか。

ヒルシュマイヤーの時代は、南山大学山里町キャンパスの長い形成期とされ、敢えて補足すればその後半と見なされるのである。

註

（1）川﨑勝・林順子・岡部桂史編ヨハネス・ヒルシュマイヤー『工業化と起業家精神』、二〇一四年、日本経済評論社。『南山学園史料集10 ヒルシュマイヤー著作集 教育論』、二〇一五年三月、南山アーカイブズ、林雅代「ヒルシュマイヤーの教育論」・永井英治「ヒルシュマイヤーの大学論」を収載。補遺として、梅垣宏嗣「ヨハネス・ヒルシュマイヤー「貿易摩擦、行革、資本主義の危機―日本の役割」翻訳と解説」・永井英治「ヨハネス・ヒルシュマイヤー「南山学園―その沿革と将来の展望」講演録と解説」、いずれも『アルケイア―記録・情報・歴史―』第九号、二〇一五年三月、南山アーカイブズ。また、二〇一四年六月に行なわれたシンポジウムの記録として奥田太郎・岡部桂史編『工業化と起業家精神―ヨハネス・ヒルシュマイヤーの時代―』（二〇一五年、南山大学社会倫理研究所）が刊行され、『アルケイア』第一〇号（二〇一六年三月、南山アーカイブズ）に「ヒルシュマイヤープロジェクト完結記念研究会」の序文・報告（奥田太郎「緒言―初めに史料があった」・岡部桂史「ヒルシュマイヤーと経営史学―ヒルシュマイヤープロジェクトの学術的意義―」・林雅代「ヒルシュマイヤーの教育論の背景―ヒルシュマイヤー文庫について」・永井英治「南山アーカイブズとヒルシュマイヤープロジェクト―研究資源アーカイブズの可能性」「川﨑勝「ヒルシュマイヤー、アーカイブズ、図書館―少しの思い込み―」）が掲載されている。

（2）リチャード・ジップル「10000 Meilen der Sonne entgegen「太陽に向かって万里の旅」―南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー師の「来日旅行談」について―」『アルケイア―記録・情報・歴史―』第一三号、二〇一八年一一月、南山アーカイブズ、同「「Klassenrundbrief des Weihekurses 1950」一九五〇年司祭叙階同期生ニュースレターに見られる南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー師の宣教師精神と人間性について」『アルケイア―記録・情報・歴史―』第一四号、二〇一九年一一月、南山アーカイブズ。

（3）二〇〇一年、南山大学。以下本稿では、事実の説明は注記しないかぎり『南山大学五十年史』に拠っている。

（4）『南山学園史料集8 南山学園のレーモンド建築（上）』、二〇一三年三月、南山学園、『南山学園史料集9 南山学園のレーモンド建築（下）』、二〇一四年三月、南山学園。このうち、下巻が南山大学のレーモンド建築を扱っている。

（5）アントニン・レーモンド「自然を基本として」『新建築』一九六四年九月号、新建築社。

（6）『南山学園のレーモンド建築』編集に際し実見した。一部が『南山学園のレーモンド建築（下）』に収載されている。

（7）K棟の奥からM棟を経て、N棟、第二研究棟へと続く校舎群が、グリーンエリアの東のパッヘスクエアの北に建てられ、さらに東に南山宗教文化研究所が建てられた。この校舎群は、キャンパスを拡張した現在では動線の一部に沿っている。

（8）この言説は、南山大学文学部中国語学中国文学科の廃止の際に利用された。

（9）安藤丈将「日本―全共闘とベ平連」西田慎・梅崎徹編『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」―世界が揺れた転換点』、二〇一五年、ミネルヴァ書房。

（10）『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園創立75周年記念誌』第二章第二節三「学生運動」岩野一郎執筆、二〇〇七年、南山学園。

（11）学長現職で没したヒルシュマイヤーが最初に倒れたとき、献血した学生たちにそれが読み取れよう。

（12）『南山学園史料集5 アルベルト・ボルトと南山学園』（二〇一〇年三月、南山学園）に収載された大学新校舎建設に関する複数の短文からは、ボルトが新校舎建設に尽力したようすが読み取れる。

（13）大学での国際化の推進については、実例の紹介を中心に多くの蓄積がある。